

未来と鉄路の行き先 ～変わりゆく日々～

132 小山工業高等専門学校

「ガクっと」

・・・ふいに徐行がくる。体がよろける。窓の外を見る。珍しい白銀の雪景色と無機質な仮設の橋がそこにある。ドアの隙間から冷たい風が吹き込む。学校説明会の資料の端がシワシワになっている。電車のジョイント音と、刻々と迫る受験の緊張のリズムが心を揺さぶる。あの時間は刻々と迫っている。空転し、必死にうなるモーターのようにもがいていく。

この光景が日常となって欲しい――

あの頃から幾分たったか――

桜がひらりひらりと舞い上がる。今はしわひとつもない教科書を読んでいる。勇気を送り出す風がドアの隙間からあふれている。日常と感じるようになった徐行区間が来る。窓を見ると美しいアーチを奏でる橋が架かっている。私の心は迷いという制限がなくなり、だんだんと加速していく――

ジョイント音とともに、私の中で熱いビートが生まれる。

鉄路も人の未来もどこまでも続いていく――